鬼ごっこ協会の活動の発展過程の検証～ステークホルダー分析を通して～

（一般財団法人 CSO ネットワーク　インパクトマネジメントラボ　アソシエイト）　大沢望

キーワード：鬼ごっこ協会、ステークホルダー分析、システムマップ

【略歴】岩手県盛岡市出身。早稲田大学公共経営大学院修了（公共経営修士）。専門は NPO 評価。社会課題解決、価値創造を目的とした様々な分野の事業に関する調査・評価に携わるほか、評価ツール開発やガイドライン策定などのインフラ整備にも注力している。日本評価学会認定評価士。鬼ごっこ協会公認２級指導者・審判員。

■研究背景

2010 年 6 月に設立された一般社団法人鬼ごっこ協会は、「鬼ごっこのある町づくり～スポーツ鬼ごっこと伝承鬼ごっこの普及～」というビジョンを掲げ、その活動を全国で展開してきた。鬼ごっこ協会が推進する「スポーツ鬼ごっこ」の公認指導員・審判員を育成するための研修会開催は、日本全国 47 都道府県への普及を達成。さらに、各地域におけるスポーツ鬼ごっこの普及活動や大会・イベントの企画運営を担う、鬼ごっこ協会の公認地域団体や公認クラブの設立も着々と全国に広がっている。その過程で、鬼ごっこ協会内部の組織も、外部のステークホルダー（活動に関係する人・組織）も多様化している。

なぜ鬼ごっこ協会の活動はここまで広がることができたのか？また、今後さらに活動が広まり、深まっていくためのポイントとは何なのか？

■研究目的

鬼ごっこ協会のステークホルダーを分析することで、各ステークホルダーの役割や関係性を明らかにし、鬼ごっこ協会の活動の発展過程についての考察を行う。

■研究方法

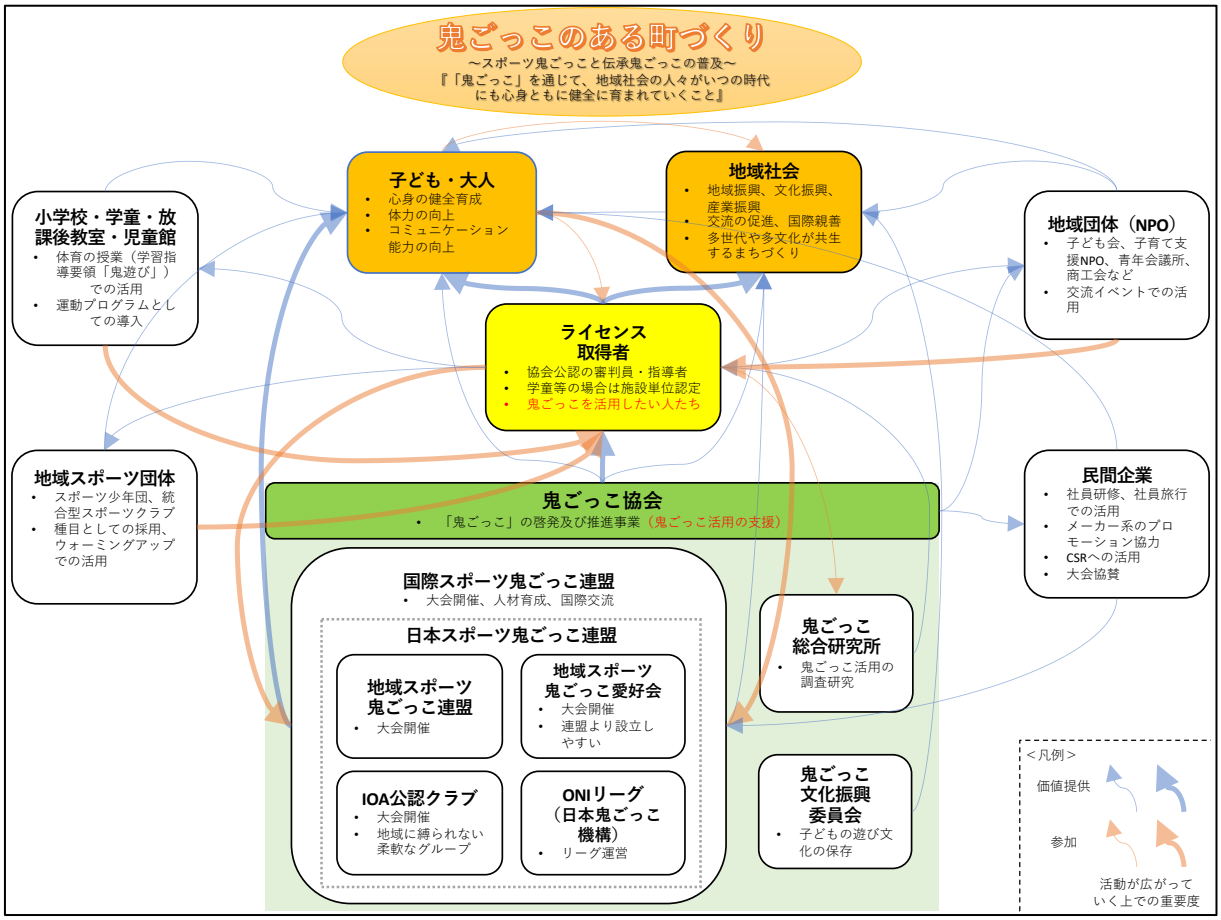
鬼ごっこ協会の羽崎貴雄氏と平峯佑志氏にインタビューすることで、鬼ごっこ協会内部の組織とステークホルダーの洗い出しを行ない、さらにそれぞれの役割と関係性についての整理を行なった。整理のための手法として用いたのは「システムマップ」[1]である。作成したシステムマップをもとに、再度羽崎氏と平峯氏と議論し、鬼ごっこ協会の活動の発展のためのポイントについての考察を行なった。

■分析結果と考察

作成された鬼ごっこ協会のシステムマップ（ステークホルダー分析図）は図１の通りである。活動の重要な受益者は「子ども・大人」と「地域社会」であり、「地域スポーツ団体」などのステークホルダーと連携しながら、様々な価値の提供を行なっている。また、一方的な価値提供だけではなく、「子ども・大人」を含むステークホルダーによる様々な

[1] 団体や事業を取り巻く環境を構成する要素や、その関係性を整理し、理解するためのマッピング技法。

図 1　鬼ごっこ協会のシステムマップ（ステークホルダー分析図）



活動への参加、関わりがあることで、各活動が自律的に発展している。

鬼ごっこ協会の特徴は、全ての活動を担おう、関与しようというスタンスではなく、各ステークホルダーの自主的な活動を尊重し、促していることである。協会としての役割を「現場の人が活動しやすい整備をする」と捉えている。活動を発展させていく主体として鬼ごっこ協会が特に重要視しているのはスポーツ鬼ごっこの公認指導員・審判員の「ライセンス取得者」だ。彼らはスポーツ鬼ごっこを何らかの課題解決や価値創造のために活用したいという目的意識を有しており、活発に活動している。そんな彼らから「現場で活動しやすくなるために必要なものは何か？」というニーズを拾うことで、地域スポーツ鬼ごっこ連盟、地域スポーツ愛好会、そして近年では IOA 公認クラブも生まれている。

鬼ごっこ協会が大切にしている価値観は「楽しい。面白い。だからやる」というシンプルなもので、だからこそ多くの人たちからの共感を得て、活動がどんどん広がっているといえる。一方で、組織間、ステークホルダー間の有機的なつながりを戦略的に構築している面もあり、「考えていなさそうで、実はしっかり考えられている」と評することができるだろう。

■参考文献

- 一般社団法人鬼ごっこ協会　ウェブサイト　http://www.onigokko.or.jp
- 社会的インパクト評価イニシアチブ　ガイドライン・ワーキング・グループ（2018）「社会的インパクト・マネジメント・ガイドライン Ver. 1」